

## 巻頭言

## 労働者協同組合法施行を前に

古村 伸宏 (日本労協連理事長/協同総研副理事長)

労働者協同組合法の施行が半年後に迫った。法律をつくるまでの長い前史を経て、法律が動き出す前に、私たちの運動を未来に紡ぐ自己変革の決意を新たにしている。労働者協同組合は、乗り越えするのが難しい。無自覚に乗るだけでは、その性能は発揮されない。そのコツは「協同労働」を装備できるかどうかにかかっている。「協同労働」は燃料であり、エンジンであり、ハンドルでもある。これらをマッチングさせ、ナビゲートを間違えてはならない。

法制化に至る私たちの前史は、自己肯定感を奮い立たせ、小さな成功を大きく意味づけ、多くの失敗を肥やしにしてきた。法制化前の生き続ける術は、走り続ける(仕事を増やし続ける)ことによって、「私たちは必要とされている」「私たちの実践は間違っていない」「私たちは正しい方向に向かっている」ことを、自覚的に共有し鼓舞しながら歴史の本編にたどり着いた。私たちの自己肯定感は法制化によって社会的に承認された。

法施行を前に、これからはじまる協同労働の新たな長い歴史を思うと、高揚感が高まる。法成立以来出会ってきた、多くの共感や期待、「協同労働」の新たな

実践者たちを思うと心強くもあり、心細さを抱えてながら生きながらえてきた過去が懐かしくさえ感じる。こうした感覚は新鮮な確信であると同時に、決して熱狂に陥らず、冷静に自らの立ち振る舞いや心根を見つめる努力を怠ってはならない。これから維持し続けるべきはこの緊張感であり、「私たちは変われるか」という自己変革の姿勢と実践である。

私たちの自己肯定は、一方で多くの否定を内包してきた。「労働者協同組合」と「株式会社」、「雇用労働」と「協同労働」といった対置の中で自己規定してきた面がある。しかし、「労働者協同組合」「協同労働」は決して万能ではない。現に私たちは多くの失敗を経験してきた。一方で「株式会社」や「雇用労働」は全てを否定されるものでもない。そもそも労働者協同組合法は、現代の社会が抱えた労働をめぐる困難を前提にしているが、これから問うべきことは、形式の優劣より「そもそも」を問うことだと言える。「経済」とは何か、「企業」とは何か、「労働」の意味と価値は何か、といった「そもそも」を問い探求し続けることこそ、労働者協同組合法が施行されるこれからのこだわりではないだろうか。

その探求は、労働者協同組合法第1条に掲げられた究極の目的である「持続可能で活力ある地域社会の実現に資する」ためである。「持続可能な世界」はどうやったら実現できるのか。「持続可能性」を損なってきた歴史の本質から問い直すべき、壮大なスケールの課題であり、小さな実践の積み重ねによって得られる実感こそが重要である。私は、この「そもそも」を探るテーマとして「生物多様性」を定めてみた。『生物多様性を問い直す』（高橋進、ちくま新書、2021年）によれば、持続可能性の危機を呼び起こした大きな要因としての生物多様性の損失は、大航海時代から植民地支配の歴史に遡る。それは資本主義や株式会社、そして国家の歴史とも重なる、人類の略奪・独占の欲求が過熱した歴史である。「経済」とは誰のため・何のためのものなのか、によって企業のあり方は左右される。その企業のあり方によって労働の意味や価値も変わる。さらに言えば、労働のあり方が暮らしや学び、地域コミュニティや一人ひとりの人生や価値観に大きな影響を与える。日本の労働者協同組合の歴史は、労働のあり方やその意味を問う中から運動を切り拓いてきた。そして、略奪や独占を増長させた「株式会社」や「雇用労働」のあり方に疑問を呈してきた。労働者協同組合法が施行されるに至り、究極の目的に迫る上で、本格的に「地域経済」のあり方を見据え実践を進める必要があ

る。それは、労働者協同組合のみによる経済ではない。多様な経済主体が一致できる労働観を共有することによる、持続可能性を守る共生に価値を置く経済ではないか。ここに協同労働を深め広げる戦略的価値がある。

こうした志向性を持ち、自らの変革を遂げ、多様な経済主体との連携によって、労働者協同組合法が掲げる社会的目的が実現可能となる。そのために、独善性を排し、多様性を重視し、共生のための協同を位置づける。20世紀に興隆した様々な社会運動の多くは、「分断」と「対立」の中で活力を失い、今を支配する経済社会に飲み込まれていった。それは、常に違いを意識し、善と悪に二分し、自らの「正」に熱狂し、内部にも分断と排除を生んだ。産業革命以降の矛盾に対抗する手段として生まれた協同組合も、同様の波に飲み込まれていないだろうか？これからの組織と運動は、根本的な転換が必要となっている。そのためには、失敗の経験を語り、未来の当事者たちの声を聞き、声なき声に耳を澄ますことも重要である。その上で、「生き続けるためのコミュニティ」を形成する作法として協同労働を運動として捉えることが求められている。普遍的で創造的な営みへと深く静かに受け継がれ、文化を編む協同労働運動の真価が問われる。